HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アンドレ・マルロー「ジャン・ムーランの遺灰のパンテオンへの移葬」：第五共和国のコメモラシオン
Author(s)	竹内, 修一
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 155, 55（左）-80（左）
Issue Date	2018-07-31
DOI	10.14943/bgsl.155.l55
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/71276
Type	bulletin (article)
File Information	155_02_takeuchi.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 155 （2018）

アンドレ・マルロー「ジャン・ムーランの遺灰のパンテオンへの移葬」
── 第五共和国のコメモラシオン ──

竹　内　修　一

パリの左岸，カルチエ・ラタンと呼ばれる地区のなか，サント・ジュヌヴィエーヴの丘のうえに，パンテオンというモニュメントがある。大学や図書館，高等師範学校などが集まる文教地区に於いて，とりわけ目立つこの巨大建造物は，そもそもパリの守護聖人の聖遺物を収めるための教会として建築されたものである。しかし大革命が起こると非宗教化されて，キリスト教の聖人の聖遺物ではなく，フランスの「偉人たち grands hommes」の「遺灰」（棺）を安置するパンテオンとなった。「パンテオン Panthéon」という語は汎神殿を意味するが，文字通りに解釈すれば，ここはフランス共和国の「神々の住処」となったのである[1]。建物のクリプトには，革命期に移葬されたヴォルテールやルソーをはじめとして，ヴィクトル・ユゴー，ジャン・ジョレス，キュリー夫妻といったそれぞれの時代に選ばれた偉人たちが眠っている。

こんにちのフランスの政治体制である第五共和国に於いて，はじめてパンテオン葬が行われたのは 1964 年 12 月 19 日である。例外はあるとはいえ，それ以前の政体では議会もしくは政府が誰をパンテオンに移葬するのかを決定していた。だが第五共和国では，巨大な権力をもつ大統領が決定権をもつことになる。最初の七年任期の終盤に於いて，大統領ドゴールは，ジャン・ムーランの棺をパンテオンに入れることを発表した。ムーランはドイツに

[1] 実際にはミラボーとヴォルテールをパンテオンに入れたときにはまだ王制の時代であった。だがそれ以降すべてのパンテオン葬は共和制の時代になされたものである。

10.14943/bgsl.155.l55

よってフランスが占領されていた時代，諸派に分裂していた国内のレジスタンス運動を統一した指導者であった。彼は全国レジスタンス評議会を組織し，初代議長に就任したあと，1943 年 6 月にゲシュタポによって捕らえられ，拷問を受けた後に死亡した。祖国解放のために尽力し，死んでいったひとりの「偉人」が，死後 20 年を経て，この日，共和国の神殿に移葬されたのである。

本稿がとりあげるのは，パンテオン葬の公式セレモニーに於いて，フランス初代の文化大臣アンドレ・マルローが行ったジャン・ムーランの追悼演説である。この演説でマルローは，レトリックを駆使して，レジスタンスの指導者の記憶のみならず，祖国が敵に占領されていた「暗い時代」の記憶を呼び起こし，聴衆たちに追体験させる。マルローのテクストとテレビで放映するために編集された映像[2] を分析することによって，ひとりの死者の「コメモラシオン commémoration」が，つまり死者を記念し，その記憶を共有することがもつ政治性について考えてみたい。われわれの考えでは，マルローの雄弁を聞きながら，このセレモニーの参加者たちが立ち会ったのは，そしてテレビでこの演説を視聴した者たちが見届けたのは，まだ年若い第五共和国の建国神話の誕生の一場面にほかならない。

時代状況

マルローの追悼演説を見るまえに，アルジェリア戦争（1954-1962）によって混迷を極めた第四共和制の終わりから第五共和制の初期に至るフランスの状況を確認しておこう。

戦争が泥沼化するなか，フランス国民は，アルジェリアの独立を支持する者とフランス領としてのアルジェリアの維持を主張する者とに分断されていた。1958 年 5 月，独立反対派のアルジェリア現地の白人住民によって暴動が

[2] この演説の様子は現在，フランス国立視聴覚研究所（INA）のサイトや youtube などインターネット上で容易に視聴することができる。

起こると，駐屯軍を指揮していた将軍たちもそれに同調し，本国の政府に反旗を翻す。アルジェリア駐屯軍のパラシュート部隊はコルシカ島を制圧し，首都パリへの侵攻の可能性が高まる。内戦の危機が迫るなか，中央政府は対応することができず，シャルル・ドゴール将軍に政界に復帰して事態を収拾することを要請する。このドゴール将軍とは，言うまでもなく，第二次世界大戦中に亡命政府「自由フランス」を率いてドイツとの戦争を指導し，フランスを勝利に導いた英雄である。彼はパリ解放後フランス臨時政府の首班をつとめたが，1946 年 1 月に突如辞任したあと，中央政府からは遠ざかっていた。1958 年 6 月，半年間の全権委任を条件にドゴールは第四共和国最後の首相に就任し，アルジェリア駐留軍首脳部はこれを歓迎した。同年 9 月に国民投票によって新憲法が承認されると，10 月には第五共和制が成立し，ドゴールは初代大統領に就任する。保守派や軍人たちの期待を一身に受けていたものの，この軍人出身の大統領は結局アルジェリア独立の承認に向けて舵を切る。こうした政府の政策に激怒した退役将軍たちが，1961 年 4 月，軍事政権の樹立をめざして反乱を起こしたが，ドゴールはこれを鎮圧する。1962 年 3 月にエヴィアン協定によってアルジェリア独立が達成される。不満を募らせる保守派や軍人たちは非合法活動に入り，フランス各地でテロ行為を行う。1962 年 8 月には，パリ郊外で大統領の暗殺を企てたクラマール事件と呼ばれる乱射事件も起きているが，そのさいドゴールは九死に一生を得ている。

ドゴール大統領が，フランス共和国の伝統であったパンテオン葬を第五共和国でも実施し，そこにジャン・ムーランを移葬することを決めたのは，このような植民地戦争の後遺症が強く残る時代のことである。それまで一般の人々にはさして知られていたわけではない，いやほとんど忘れ去られていたと言ってよい，レジスタンス運動の指導者ジャン・ムーランは，このパンテオン入りを契機として，フランス国民のあいだで圧倒的な知名度を誇るようになる[3]。こんにち，彼の名を知らないフランス人はいないと言っても過言

[3] 1965 年 5 月，つまりこのパンテオン入りの半年後，パリ 14 区にある大通りが，「ジャン・ムーラン大通り」と改称される。その近くにはパリ解放のさいに一番乗りしたことで名

ではないのである。そしてムーランの名を知らしめるのにもっとも貢献したのが，20 世紀の追悼演説の傑作として名高いマルローの「ジャン・ムーランの遺灰のパンテオンへの移葬」なのだ。

演説冒頭

マルローの追悼演説に関しては，テレビで放映するために編集された映像が残されており，この記念式典当日の様子を知ることができる。この映像は，政府の車がパンテオン広場に到着し，軍服姿のドゴールとマルローを含む閣僚たちがパンテオンに向けて歩んでゆく場面からはじまる。パンテオンの前に設置された巨大な棺台の上に，黒布がかけられたムーランの棺が置かれている。強い風が吹いて，その黒布をたなびかせる。黒いコートに身を包み，黒いサングラスをかけたマルローが棺の前方に設置された演台に歩み寄る。ムーランの遺族，かつて対独レジスタンスに参加した者たち，ポンピドゥー首相をはじめとする閣僚，そして多くの一般聴衆が見守るなか，「共和国大統領」だけを呼びかけ人として，彼の演説は次のようにはじまる。

> 共和国大統領閣下
>
> 二十年以上前，おそらく本日のような十二月の天候の中，ジャン・ムーランは出発して，プロヴァンスの地にパラシュートで降り立ち，夜の時代の民衆の首領となりました。本日のセレモニーがなかったとしたら，いったい何人のフランスの子供たちが，彼の名を知るでしょうか。彼自

高い将軍の名を冠する「ルクレール将軍大通り」が位置している。1994 年，つまりドゴール派のシラク大統領の時代には，フランスの解放に貢献したこの二人ために，モンパルナス駅の近くに「ルクレール・ムーラン記念館」が設置された。また現在フランスの多くの学校がジャン・ムーランの名前を採用しているが，そのなかでも特筆すべきは，リヨン第三大学である。学問的には何の業績ももたないにもかかわらず，ムーランは，ヴァレリー（モンペリエ第三大学），ディドロ（パリ第七大学），デカルト（パリ第五大学），パスカル（クレルモン＝フェラン第二大学）等と並んで，大学の名に冠されているのである。

身もまた［偽名をつかっていたので］自分自身の名にふたたび出会ったのは，まさに殺されるときでしたが。それ以来，実に千六百万の子供たちが生まれました……

二つの戦争の数々のコメモラシオンが，この人がかつて鼓舞し，いまや象徴する影の時代の民衆が復活することによって達成されますように。その民衆もまた彼の亡骸の貧しくも厳粛な衛兵としてここに入るのです。（117–8[4]）

このように，演説冒頭で呈示されるのは「パラシュート」で「プロヴァンスの地」に落下するジャン・ムーランのイメージである。1941 年 10 月にムーランはロンドンに行き，そこでフランス亡命政府を率いていたドゴールに会い，彼の指揮下に入る。12 月 31 日，ムーランはロンドンを出発し，翌日，つまり 1943 年の元日にフランスに帰還した。実はすこし先でマルローは，ドゴールに面会したときのムーランの姿を描くことになる。だから，時系列で言えば順序が逆であるのだが，にもかかわらずマルローは，「夜の時代の民衆」つまりドイツの支配下にあった人々の「首領＝頭 chef」になるために，飛行機から「パラシュート」でフランスに帰還するムーランの姿を最初に示すのである。

第二パラグラフは ── 上の日本語訳では便宜上ふたつの文にしたが ── フランス語原文では一つの祈願文（「Puissent... でありますように」）で構成されている。この祈願文には，ジャン・ムーランの追悼演説によってマルローが何を行おうとしているのかを読みとることができる。彼は戦争の「コメモラシオン」によって，つまり戦争の記憶を喚起し，その記憶を共有することによって，「影の時代の民衆」の「復活 résurrection」を達成しようとするのである。「影の時代の民衆」とは言うまでもなく第一パラグラフにあらわれ

[4] この演説の引用は以下の版から行い，該当ページ数を記す。引用文中の［　］は，引用者による注記である。また原文のイタリックによる強調は傍点で，引用者による強調は下線で示す。
André Malraux, *Oraisons funèbres*, Gallimard, 1971.

ていた「夜の時代の民衆」の言い換えであり[5]，ドイツによるフランス占領下の暗い時代を生きた人々を指す。そして，「復活」という語は，否応なしに，イエスの「復活」や，最後の審判のさいの死者の「復活」というキリスト教の信仰を想起させる。しかし政教分離を憲法に掲げるフランス第五共和国のセレモニーに，キリスト教の教義を混入することはできない。ここで言われる「復活」は，キリスト教が約束する肉体の復活ではなく，あくまでも人々が記憶を共有することによって達成されるものなのだ。

この冒頭でさらに注目しておきたいのは，ムーランとフランスの暗い時代を経験した人々（「夜の時代の民衆」「影の時代の民衆」）以外に，この時代をまったく知らない者たちにマルローが言及していることである。すなわち，このセレモニーがなければ，おそらくムーランの名前を知ることはない「フランスの」「1600 万の子供たち」である。こうした戦後生まれの子供たちは，言うまでもなく，戦争の記憶をもたない。にもかかわらず，この演説を通してマルローは，「戦争のコメモラシオン」によって彼等に，ドイツ占領下の暗い時代の記憶，そして祖国解放の英雄であるムーランの記憶を共有することを求める。演説最終部に於いて，こうした「子供たち」こそが，この文化大臣がとりわけメッセージを伝えようとする相手であることが判明するだろう。

ドゴール主義とジャン・ムーランの軌跡

冒頭でムーランのパラシュートによるフランス帰還の場面を描いたあと，マルローは時間をさかのぼり，その数ヶ月前のムーランとドゴールの邂逅について語る。ドイツに協力的なペタン元帥首班の政府が成立すると，ジャン・ムーランはウール・エ・ロワール県知事の職を解かれる。ドイツの直接

[5]「夜 nuit」と「影 ombres」は，ドイツ占領下の暗い時代を象徴的にあらわす語として，この追悼演説のなかで何度も使用される。ただし「夜の民衆」「影の民衆」という直訳では意味が分かりにくいので，「夜の時代の民衆」「影の時代の民衆」と訳すことにする。

的支配が及んでいない南部地域でレジスタンス運動に身を投じたあと，ムーランはポルトガルのリスボン経由でロンドンに行き，そこで「自由フランス」を組織していたドゴール将軍と面会する。それはレジスタンス活動に必要な資金や武器を要請するためであったが，と同時に，ドゴールの「精神的承認と，彼とのあいだの頻繁で，迅速で，確実な結び付き」（121）を求めるためであった，とマルローは言う。この将軍とはまさしく演説を近くで聞いている共和国大統領であるわけだが，ムーランと面会した頃のドゴールをマルローは次のように描いている ――

> 当時将軍は最初の日の「否」を，どのような場所であれ，どのようなかたちであれ，戦いの継続を，そしてフランスの運命を，引き受けていました。（121）

この「最初の日の『否』」とは，パリ陥落後，ペタンがドイツとの休戦条約を結んだあと，ロンドンに脱出していた准将ドゴールが BBC ラジオで放送した名高い「6 月 18 日の訴え」のなかに出てくる「否 Non」を指している。そこでドゴールは，フランスは戦争に負けたのか，と問いかけ，「否である」と主張していた。フランスが負けたのは戦闘であって，戦争ではない。イギリスやアメリカと連携してフランスは戦いを継続せねばならない，戦う準備のある者は私の下に結集せよ，とドゴールは訴えたのである。

「最初の日」に言及することで，マルローがここで聴衆たちに思い起こさせるのは，ドゴールが敗北を拒否し，最後まで戦いを継続してフランスを勝利に導いたことである。たしかに，時間が経過するにつれて，各地でドイツやヴィシー政権に反抗する複数のレジスタンス運動が生まれた。しかしドゴールこそが，「最初の日」から戦争のすべての期間を通じて，フランスのドイツに対する戦いの象徴であった。「ドゴール将軍だけがレジスタンス運動を統一へと導くことができたのです［…］。なぜなら，彼だけを通して，フランスは唯一の戦いを行っていたからです。」（121-2）あの時代には，アフリカ出身の兵士たちもコミュニストたちも皆「ドゴール主義」の名の下に戦ったので

ある。

> アフリカの軍隊は，プロヴァンスからヴォージュに至るまで，ドゴール主義の名に於いて戦うのであり，コミュニストたちの部隊もまたそうするのです。(122)

祖国が占領されていた時代には，政治的なイデオロギーの違いなど問題にならなかったのだ。すこし先でマルローは，レジスタンスとドゴール主義，そしてフランス国民との関係ににについて次のように言う。

> 国民が危機にあるとき［…］いわゆる政治的意見など重要視せぬこと。ヨーロッパに鳴り響いていた全体主義の教義に国民こそがもうすぐ打ち勝つであろうと考えること。レジスタンスの統一に国民の統一のための闘争の最大の手段を見出すこと。これこそがおそらく，あのとき以来ドゴール主義と呼ばれたものを明確にすることでした。そしてたしかにフランスが生き延びていることを宣言することでありました。(126)

この時代に誕生したドゴール主義こそがフランスを生き延びさせ，対独レジスタンスを統一し，それがフランス国民の統一につながったのだとマルローは言うのである。そしてドゴール主義をもっとも体現していたのが，フランス本国に於いてドゴールの代理人として活動するジャン・ムーランにほかならない。「ムーラン氏の使命は，フランス本国の直接には占領されていない地域で，敵と対独協力者に抵抗する人々すべての行動の統一を実現させることである。」(122) ドゴールによって与えられたこの命令の写真をマッチ箱の二重底に潜ませて，ジャン・ムーランはイギリスを離れ，フランスに帰還したのである。

ムーランは南部地域で活動を開始する。当時の南部地域には，主としてコンバ，南部解放，フラン・ティルールというレジスタンスの三大組織があった。そうした組織の指導者たちに対して，レジスタンス運動の分断がどれほ

ど危険であるのかを，倦むことなく，繰り返し，ムーランは説いた。連合国の軍隊が大陸に上陸し，フランス本土がふたたび戦場となることは確実である。同盟国の軍隊を助けるために，レジスタンスは全体の計画にしたがって統一行動をとらねばならないのだ，と彼等を説得したのである。またムーランは急進社会主義者，反動的な思想をもつ教師たち，リベラルな将校たち，モスクワから帰還したコミュニストやトロツキスト，さらにはカグール団という極右政党の生き残りといったまったく異なった信条をもつ者たちを自分たちのレジスタンス運動に導き入れていく。

1943 年 1 月，南部で三大組織が合併して統一レジスタンス運動（MUR）となり，ムーランは議長に就任する。1943 年 2 月，秘密軍隊の長ドレストラン将軍とともにムーランはふたたびドゴール将軍に面会するためにロンドンに行く。3 月，彼がフランスに帰還すると，北部地域も含めたフランス全体のレジスタンス諸運動，政党，労働組合を組織して，全国レジスタンス評議会（CNR）が結成され，ムーランは初代議長に就任する。

6 月 21 日, 諸運動の代表と会うためにムーランはリヨン近郊のカリュイールに行くが，仲間の「裏切り」によってゲシュタポに捕らえられる。ムーランはリヨンのモンリュック要塞に連行され，拷問を受ける。しかし彼は沈黙を保ち続け，決してレジスタンスの情報を漏らすことはなかった。もはや口を聞くことさえできなくなったムーランに，ゲシュタポは筆記具を差し出すが，ムーランはこれから自分を殺すことになるドイツ人のカリカチュアを描いた。彼の姉の文章を引用しつつ，ムーランの最期をマルローは次のように描いている。

> そのあとに続く恐ろしきことに関しては，彼の姉の簡潔な言葉を聞きましょう。「彼の役割は演じられました。彼の受難が始まります。嘲弄され，野蛮に叩かれ，顔は血まみれで，臓器は破裂し，彼は人間の苦しみの限界にまで達しますが, 何一つ秘密を漏らすことはありませんでした。すべてを知っていたにもかかわらず。」まだ彼が話したり字を書いたりすることができた数日間のあいだ，レジスタンスの運命はこの人の勇気

に掛かっていたことを理解しましょう。ムーラン嬢が言うように，彼はすべてを知っていたのです。(133)

ここでジャン・ムーランは明らかにキリストにたとえられている。イエスがユダに裏切られローマの官憲に引き渡されたように，ムーランは仲間の裏切りによってゲシュタポに捉えられる。イエスのように嘲弄されたあと，ムーランは拷問で「人間の苦しみの極限にまで達し」，彼の「受難 calvaire」を言わば完遂するのである。しかしこのジャン・ムーランの犠牲のおかげで，フランスに勝利がもたらされるのだと，マルローは強調する。「残酷な代償の払われたこの沈黙の勝利が，ここにあります。運命が揺り動きます。」(133)

ムーランへの二人称での呼びかけ

ジャン・ムーランの死を語ったあと，演説が後半部に入ると，マルローの口調と演説の形式が大きく変わる。これまでは三人称を使って客観的にムーランの活動を描いていたのに対し，突如マルローはムーランに対して二人称で呼びかけはじめる。そして抑制していた声が，何かにとり憑かれたような，熱をおびた声に変わる。それはあたかも死者が目の前にいるかのように語り出すシャーマンの声のようだ ――

醜悪な地下室で殉じたレジスタンスの首領よ，消え去ってしまった君の眼で，われらが同志たちを見守る喪服を着た夫人たちを見よ。彼女たちはフランスの喪に，そして君の喪に服しているのだ。ケルシーの背の低い樫の下から，モスリンを縫い合わせた旗とともに，マキが滑るように進むのを見よ。大きな木しか注意していないゲシュタポは，決して彼等を見つけることはできない。贅をきわめたヴィラに入り，なぜ浴室があたえられるのか自問している囚人を見よ。彼はまだ浴槽のことを耳にしたことがないのだ。(133-4)

ドイツ人によって殺されたレジスタンス参加者のために喪に服す女たち，森に潜伏して活動したために灌木密生地帯を意味する「マキ maquis」という語で呼ばれたレジスタンスの集団の活動，浴室で拷問を受けることになるフランス人の囚人。繰り返される「見よ Regarde」という動詞の命令形によって，マルローがここで「醜悪な地下室で殉じたレジスタンスの首領」に見せようとするのは，彼が死んだ頃のフランスの状景である。だが，形式上は死んだムーランに向けて発せられるこの呼びかけは，言うまでもなく，実際にはパンテオン広場のまわりにいる聴衆たち，そしてテレビでこの演説を視聴する者たちに向けられているはずである。生き残ったフランス人たちに，いま彼の声を聞く者たちに，暗い時代のフランスの姿をマルローは思い起こさせる。いやむしろ，かつてのフランスの姿を，言わば想像力によって，「見る」ことを求めるのだ。

このあとも，実際には決して声を聞くことはできないはずの，死んだムーランに向けて，マルローは「見よ！」という命令文を反復する。

> 処刑された影の時代の哀れな王よ，見よ，至るところで拷問が行われていた六月の夜，影の時代の君の民衆が立ち上がる！目をさました家畜が長い鳴き声をあげるなか，ドイツの戦車がけたたましい音をたててノルマンディーに向けて上ってゆく。君のおかげで，戦車は間に合いはしないだろう。連合軍の突破がはじまるとき，見よ，知事よ，フランスのすべての街で共和国の委員たちが，もし殺されていなければ，あらわれる。わたしたちと同じく，君はルクレールの浮浪者のような兵士たちをうらやんだものだ。見よ，闘志よ，コナラの木のマキ［灌木密生地帯］から，君の兵士たちが四つん這いであらわれ出て，バズーカの使い方を覚えた彼等の農民の手で，ヒトラー帝国の第一の師団を，ダス・ライヒ師団を止める。(134-5)

「処刑された影の時代の哀れな王」というムーランに対する呼称が，「ユダヤ人の王」として処刑されたイエスを参照していることは明らかであろう。

ここでもまた，ムーランはキリストにたとえられているのだ。先ほどの一節が，暗い時代にフランス人が経験した苦しみを想起させていたとすれば，ここではドイツに対するレジスタンスの蜂起が叙事詩的に描かれている。かつてムーランによって組織されたレジスタンスは，貧しい装備しかもたないにもかかわらず，ヒトラー帝国の最強の「ダス・ライヒ師団」を止め，連合軍のノルマンディー上陸を助け，やがてフランスを解放に導く。こうしてマルローは，ムーランの死後，フランスが勝利する様子を，聴衆たちに追体験させるのである。言うまでもないが，マルローそのひとがこのような光景を見たことがあるわけではない。彼は超越的視点から歴史的出来事を俯瞰し，そのひとつひとつを，あたかも目の前で繰り広げられる出来事であるかのように，言葉の力で現前させるのである。逆に言えば，ここでも聴衆たちは，文化大臣のシャーマンのような声を聞くことによって，その大多数にとっては実際に目撃したわけではないレジスタンスの蜂起とドイツとの戦いの光景を，想像力によって，いま，そこで起きている出来事であるかのように思い描くのである。

蜂起したレジスタンスとドイツとの戦い，そしてフランスの勝利を描いたあとも，なおジャン・ムーランへ向けた命令法が続く。マルローは次のように呼びかける。

> アフリカの太陽とアルザスの戦いで昂揚した葬列とともに，ルクレールがアンヴァリッドに入ったように，ここに入れ，ジャン・ムーランよ，君の恐ろしき葬列とともに。君のように，地下室で決して語らなかった者たちとともに。そして，おそらくもっと恐ろしいことであるが，語ってしまった者たちとも一緒に。強制収容所で抹殺された者，坊主にされた者，『夜と霧』のおぞましき人の列のなかで最後につまずき，銃床の上に倒れた身体とともに。強制労働に行ったまま帰還しなかった八千のフランスの女たちとともに。わたしたちのうちの一人に隠れ家を提供したためにラーフェンスブリュック収容所で死んだ最後の女性とともに。影とともに生まれ，影とともに消え去った民衆とともに，夜の時代のわれ

らの兄弟たちとともに，入るのだ。(135-6)

このパラグラフでは，関係詞節のなかにあるものを除くと，動詞は二度しかあらわれない。それは両者ともに命令法に置かれた「Entre 入れ」という動詞である。二人称で語りかけられた死者ムーランに対して，パンテオンに入るように言っているだけなのだ。ここで特徴的であるのは，前置詞「Avec とともに」の反復である。ムーランはパンテオンに入る。だが，彼とともに，マルローが「夜の時代のわれらの兄弟」と呼ぶ者たち，すなわち強制収容所で抹殺された者，坊主にされていた者，強制労働に駆り出されて帰還しなかった八千人のフランス人女性，同胞を匿ったために死んだ者，あの時代に死んでいった彼等／彼女等の記憶もまた，パンテオンに入るのである。演説冒頭で予告されていたとおり，レジスタンスの「首領＝頭 chef」の「亡骸の［…］衛兵として」「夜の時代の民衆」もまた共和国の神殿に入るのである。

ところで，これ以前のパラグラフでは，過去のドイツとの闘争が，動詞の命令形を使って，言わば歴史的現在の手法で描かれていたのに対し，ここで時間はいっきに現在時に戻っていることに注意しよう。1944 年のレジスタンスの蜂起と連合軍のノルマンディー上陸を描くさきほどの一節と，このセレモニーの当日 ── マルローにとっての今，ここで ── ムーランにパンテオンに入るように呼びかけるこの一節のあいだには，たしかに時間的な断絶がある。にもかかわらず，その断絶を感じさせないのは，動詞の命令法が連続して使われているからである。命令法を連呼することによって，ムーランの死からレジスタンスの蜂起，ドイツとの戦い，フランスの解放，そしてムーランのパンテオン入りがあたかも一連の出来事であるかのようにマルローは提示するのだ。その一方で，これらの出来事を一連のものと提示することによって，そのあいだに生じた出来事，つまり第四共和国の時代に起きた様々な出来事は捨象されてしまっていることに注意しておこう。

若者への二人称での呼びかけ

ジャン・ムーランに対して，戦争中に死んでしまった他のフランス人たちの記憶と一緒に，パンテオンに入るようにマルローは呼びかけた。通常の演説であれば，この呼びかけで終わることも可能であったであろう。だが演説は続く。このあとマルローはみずからレジスタンスに身を投じていた頃に聞いた歌の思い出を語り出す。それはベルジェ大佐の偽名で彼がアルザス＝ロレーヌ旅団を率いて，ストラスブールにまで突撃して行った頃に聞いた歌である ――「本日のオマージュはこの歌を呼び起こします。この『パルチザンの歌』を，共闘の歌として人々が口ずさむのを［…］ヴォージュの霧の中で，アルザスの森の中で人々が歌うのを私は聞きました。」(136) この一節をマルローが発するかたわら，儀仗兵による太鼓の音と「パルチザンの歌」のコーラスが聞こえてくる。実に入念な演出がなされているのだ。そして演説の最終部でマルローは，ふたたび言葉の宛先を変える。ジャン・ムーランではなく，いま彼の声をフランスのどこかで聞いているはずの「フランスの若者」に対して，マルローは次のように命令法を用いて呼びかける。

> 聞きなさい，フランスの若者よ，わたしたちにとって不幸の歌であったものを。これこそが，ムーランの遺灰の葬送行進曲なのです。共和歴二年のカルノーの遺灰の横で，悲惨なものたち（レ・ミゼラブル）と一緒にいるヴィクトル・ユゴーの遺灰の横で，正義に見守られたジョレスの遺灰の横で，ジャン・ムーランの遺灰が，影の時代の民衆の，形の歪んでしまった長き葬列とともに，どうか安らかでありますように。本日，若者よ，君がこの人のことを思ってくれますように。最後の日の，形をなくした哀れな彼の顔に，決して語ることのなかった彼の唇に，君は手を近づけてみることもできたでしょう。あの日，ムーランの顔はフランスの容貌であったのです……（137）

演説冒頭でマルローがムーランの死後に生まれた「1600 万の子供たち」にわざわざ言及していたことを思い起こそう。その「子供たち」がここで集合名詞「フランスの若者 Jeunesse de France」としてふたたびあらわれ，ジャン・ムーランと同じく，二人称単数「君」と呼ばれているのだ。この「君」に対して「パルチザンの歌」を，すなわち「わたしたちにとって不幸の歌」であったものを「聞きなさい」とマルローは命令するのである。あとで詳しく見るように，このようなマルローの語り方の変化が，つまり演説冒頭では三人称であらわれていた人々に対して，最終部に於いて二人称で呼びかけることが，聴衆たちに興味深い効果をもたらすことになる。

ところで，演説冒頭と同じく，この最終部にも動詞の接続法を使った祈願文があらわれることに注目しておこう。ひとつはジャン･ムーランをめぐる，他方はフランスの若者をめぐる祈願文である。まず，ムーランに対して，すでにパンテオンに眠る共和国の偉人たち，すなわち 19 世紀を代表する作家ヴィクトル・ユゴー，フランス革命期の将軍ラザール・カルノー，そして社会党の代議士ジャン・ジョレスの横で，安らかに眠って欲しい（「どうか安らかでありますように qu’elles reposent」）とマルローは言う。すでにパンテオンに眠る偉人の名をわざわざ連呼して，そうした偉人たちの系譜にジャン・ムーランを位置づけようとしているわけだが，ここでとりわけ興味深いのはジョレスの名前だろう。作家マルローが『レ・ミゼラブル』の作者に言及し，ドゴール将軍の側近マルローが軍人カルノーを讃えることはさして不思議なことではあるまい。しかし後に共産党機関紙となる新聞『リュマニテ』を創刊したフランス旧社会党（SFIO）の指導者であり，右翼の放った凶弾に倒れたジョレスに肯定的に言及することは，共産党も社会党もイデオロギー的に敵対する政党である以上，マルロー以外のドゴール主義者たちにはできなかったはずである。かつて左翼に共感を示し，スペイン市民戦争では義勇軍に参加して共和国側でフランコと戦った経歴をもつマルローであるからこそ，ここでジョレスの名を言うことができたはずなのだ。そして国民作家ユゴーと軍人カルノーだけでなく，言わば左翼の象徴であるジョレスの横に眠ることによって，ジャン・ムーランが決して保守派だけを代表するのではな

く，右も左も含めたフランス全体の「偉人」であることが保証されるのである。

演説の最後に置かれたもう一方の祈願文は，死者であるジャン・ムーランではなく，いまマルローの声を聞いているはずのフランスの若者たちに関するものである。「若者よ，君がこの人のことを思ってくれますように jeunesse，puisses-tu penser à cet homme」と，マルローは二人称を使って「若者」に親しく呼びかけ，フランスを救ったムーランのことを思ってくれるように，祈願している。演説の終わりに，マルローが望むのは，ムーランに一度も会ったことのない者たちが，ムーランの記憶をまったくもたない者たちが，拷問されて形のゆがんだ「最後の日の」彼の顔を，そしてその顔が象徴する当時のフランスの姿を，思ってくれることなのだ。ここには，実際にはムーランを知らぬ者たちに，ムーランの記憶を伝えようとするこの文化大臣の意志を確認することができるだろう。演説が終わると，「パルチザンの歌」のコーラスを「葬送行進曲」として，ムーランの棺は兵士たちによってパンテオンのなかに運ばれてゆく。

世俗のミサとしての共和国セレモニー

ジャン・ムーランのパンテオン葬に於いてマルローが行った追悼演説はおよそ以上のようなものである。この文化大臣の目的がまだ年若い第五共和国に於いて，国民共通の記憶を創出することであるのは明瞭であろう。フランス国民が，みずからが誰であるのかを知るために思い出すべきであるのは，フランス革命のことでも，ナポレオン帝国のことでも，普仏戦争での敗北や第一次大戦の勝利でもない。第三共和制のことでもなければ，ましてやアルジェリア戦争で混乱した第四共和制のことでもない。ドゴールを首班として成立した第五共和国の国民が，いま思い出すべきであるのは，ドイツによって祖国が占領されていた暗い時代であり，その時代にフランスのために死んだジャン・ムーランであり，とりわけ「最後の日」の「形をなくした」彼の顔なのだ。第二次大戦中の対独レジスタンスを特権的な参照項とするフラン

ス国民のアイデンティティをマルローは確立するのである。

おそらくこの演説は，国民というものの成り立ちを考えるうえで，エルネスト・ルナンの「国民とは何か」（1882 年）に比べるべき重要なテクストである。普仏戦争の敗北のあとソルボンヌで行われた講演に於いて，ルナンは，国民の本質とは，すべての個人が多くの事柄を共有し，また全員が多くのことを忘れていることである，と述べた。フランス国民が成立するためには，フランス人同士の「兄弟殺し」であった聖バルテルミの虐殺や，13 世紀の南仏の虐殺は忘れ去られてしまっていなければならない，とルナンは指摘していた[6]。同様に，マルローは，国民の分裂を避けるために，フランス人たちにナチス・ドイツによって祖国が占領されていた時代を，そしてジャン・ムーランによって国内レジスタンスがドゴール主義の下に統一されたことを思い起こさせ，そのことによって，アルジェリア戦争という近い過去の記憶を抑圧するのである。

しかしながらルナンが最終的には，国民とは「日々の人民投票」である，と主意主義的な国民の定義を行っていたのに対し，マルローがここで訴求するフランス第五共和国の国民はそうした定義とはかけはなれたものであるように思う。この演説は，所謂記念式典に於ける政治家の演説といったものではないし，学者が一般大衆に向けて行う講演ともやはり異なる。それがいったい何に似ているかと問われば，われわれは，キリスト教徒が長いあいだ教会で行ってきたミサに，ミサに於ける司祭の説教に，近いものであると答える。これまで見てきたこの追悼演説の内容と形式，そして演説が人々にもたらすであろう効果を考察してみれば，これは世俗のミサであると言ってもよいと思われる。

このセレモニーを世俗のミサであると考える理由として，第一に指摘すべきは，ムーランの活動を跡づけていた演説の内容である。かつて教会では，受胎告知に続く降誕から，布教，磔刑，そして復活に至るイエス・キリストの事績が繰り返し信者たちに教えられていた。マルローが描くジャン・ムー

[6] ルナン他『国民とは何か』，インスクリプト，1997 年，48 頁。

ランの軌跡はそうしたイエスの事績とたしかに重なり合う。すでに見たように，ゲシュタポに捕らえられて死んでゆくジャン・ムーランの最期はキリストの「受難 calvaire」に比せられていた。イエスが弟子のひとりであったユダに裏切られたように，ムーランは仲間の「裏切り」によりドイツ人に捕らえられ，「人間の苦しみの極限」を経験して，死んだ。マルローはまた，死んだムーランに対して，「影の時代の民衆の哀れな王よ」と呼びかけていたが，この呼称には，前述したように，まさしく荊冠を被らされ，人々に嘲弄されたながら「処刑場＝カルヴァリーの丘 calvaire」へと向かい，「ユダヤ人の王」として処刑されたイエスのことがふまえられているはずだ。

このようにムーランの最期とイエスの最期が重ね合わせられていることを考慮に入れれば，ムーランを描いたその他の部分にもやはり「神の子」の姿があらわれていることに気が付くはずである。演説冒頭を思い出してみよう。はじめにマルローが示していたのは，「夜の時代の民衆の首領になるために」「パラシュート」でプロヴァンスの地に落下するムーランのイメージであった。そもそものはじまりに於いて，このレジスタンスの指導者はまさしく天から降臨する救世主として登場していたのである。

そうであるとすれば，フランスに帰還したあと，当時分裂していたレジスタンス運動を統一していくムーランの活動もまたイエスの活動に比すことができるように思う。コミュニストやトロツキスト，リベラルな思想をもつ者，保守的な思想をもつ者，極右の政治団体であるカグール団の生き残りといった立場が違う者たちを説得し，対独レジスタンス運動に導いてゆくムーランの姿には，人々に真の神の信仰を説いてまわったイエスのことがふまえられているはずだ。イエスが様々な神を信仰していた人々をひとりの神の信仰に導いたように，ムーランは様々なイデオロギーを信奉していた者たちをドゴール主義という「福音＝良い知らせ Bonne Nouvelle」を説いて統一するのである。

さらに付け加えていえば，ムーランという救世主の死を告げたあと，マルローが描いていたレジスタンスの蜂起は，おそらくキリスト教が約束する死者の「復活」に対応するものである。「見よ Regarde」という動詞の命令形を

反復して，マルローはあたかも今，目の前で繰り広げられる光景であるかのように，レジスタンスの蜂起を描いていた。

> 処刑された影の時代の哀れな王よ，見よ，至るところで拷問が行われていた六月の夜，影の時代の君の民衆が立ち上がる！［…］見よ，知事よ，フランスのすべての街で共和国の委員たちが，もし殺されていなければ，あらわれる。［…］見よ，闘志よ，コナラの木のマキから，君の兵士たちが四つん這いであらわれ出て，バズーカの使い方を覚えた彼等の農民の手で，ヒトラー帝国の第一の師団を，ダス・ライヒ師団を止める。(134-5)

演説のはじめにマルローが「影の時代の民衆」の「復活」を祈念していたことを思い起こせば，「影の時代の民衆」が「立ち上がる」のを描くこの一節が，その「復活」に呼応していることは明らかだろう。キリスト教の教える死者の「復活」とは語源的に言えば，「立ち上がる」ことを意味する。上で下線を引いた動詞（「立ち上がる se lever」「あらわれる（上に出てくる）surgir」「あらわれ出る（外に出る）sortir」）はその「復活」を示すためにわざわざ採用されているのである。この一節を聞きつつ，聴衆の記憶のなかで ── いやむしろ想像力のなかで，と言うべきか ── かつてドイツと戦うために蜂起したフランス人たちが，今また「立ち上がる＝復活する」のだ[7]。だがそれは，実際にはこうした光景のひとつひとつを見た者など誰もいない以上，ひとびとの記憶に於けるレジスタンスの「復活」であるというよりは，集合的記憶の再構成であると言う方が的確であろう。

ともあれ，マルローの追悼演説は，救世主の降臨，福音，受難，そして死者の復活にいたるまで，キリスト教が教えるところをふまえて構成されているのである。ここでわれわれは，影の主役のことに思い至る。もしムーラン

[7] テレビ放映のために編集された映像を見ると，後半部では，演説するマルローの姿の合間にパラシュートの写真が幾度も挿入される。おそらくこうしたパラシュート群は，キリスト教の教義では，死者が復活するさいにあらわれると言われる天使に対応するものだろう。

がイエス・キリストにたとえられているとすれば，フランスの〈外〉であるロンドンにいて，ムーランにレジスタンスを統一するように「使命 mission」を与えてフランスに派遣したシャルル・ドゴールについてはどう考えればよいのか。彼は，マルローの演説を軍服姿で聞く第五共和国の初代大統領は，かつて救世主を遣わして，フランスを救った真の「神」として登場しているのである。

三人称の死者から二人称の死者へ

われわれがこの追悼演説を世俗のミサであると言うさらなる理由は，マルローが言葉を繰り出す形式に，そしてその形式がもたらす効果にかかわっている。

この演説を契機として，フランス国民にとって，とりわけフランスの若者たちにとって，ジャン・ムーランは身近な死者になるのである。それは単にムーランの知名度が上がるということではない。「死者の政治学」について考察した書物[8] で田中悟が提唱した「死者人称論」を援用するならば，このマルローの演説によって，ジャン・ムーランは「三人称の死者」であることを止め「二人称の死者」になるのだ。

われわれ誰しも一生のあいだに様々なかたちで死に遭遇するが，各々の死は同じインパクトをもつものではない。このことを考えるときに示唆的であるのが，哲学者ジャンケレヴィッチが峻別した「死の人称」である。一人称の死とは「わたしの死」であり，通常ひとはこの自分の死を体験することはできない。二人称の死とは「あなたの死」であり，身近な存在，親しい者の死であり，たとえば肉親や友人の死にあたる。三人称の死とは「彼／彼女の死」であり，たとえば新聞の死亡記事に掲載されている，会ったこともない人々の死，名前が分かったとしても，決して「顔」を思い浮かべることので

[8] 田中悟『会津という神話 ――〈二つの戦後〉をめぐる〈死者の政治学〉』，ミネルヴァ書房，2010 年。「死者人称論」に関して理論的考察が行われるのは，序章および終章である。

きない者の死である。三人称の死がこのわたしにほとんど影響を与えることはないのに対し，二人称の死はわたしに強いインパクトを与える。たとえば新聞やテレビの報道で，自分の住む場所から遠く離れたところで災害や事故によって死者が出たと知ったときより，かつて一度でも二人称（あなた，お前，きみ……）で呼んだことがある者の死 ── それがたとえペットであったとしても ── の方が，われわれにとって重大事なのである。

だが，ここで問題としたいのは，「死の人称」ではなく，「死者の人称」である。中性的な普通名詞「死」ではなく，かつてこの世に生きた，ひとりの「死者」が問題なのだ。演説冒頭を思い起こそう。マルローはこう言っていた。

> 二十年以上前，おそらく本日のような十二月の天候の中，ジャン・ムーランは出発して，プロヴァンスの地にパラシュートで降り立ち，夜の時代の民衆の首領となりました。本日のセレモニーがなかったとしたら，いったい何人のフランスの子供たちが，彼の名を知るでしょうか。彼自身もまた［偽名をつかっていたので］自分自身の名にふたたび出会ったのは，まさに殺されるときでしたが。それ以来，実に千六百万の子供たちが生まれました……

ここでジャン・ムーランは三人称 ──「彼 il」── としてあらわれている。ゲシュタポに虐殺されるまでのムーランの軌跡を描く，マルローの追悼演説の前半部に於いて，ムーランはその主題であったのである。それに対して，演説後半部でムーラン死後のフランスの状景を喚起するさいに，マルローはいきなりムーランに対して二人称で呼びかけていた。

> 醜悪な地下室で殉じたレジスタンスの首領よ，消え去ってしまった君の眼で，われらが同志たちを見守る喪服を着た夫人たちを見よ。彼女たちはフランスの喪に，そして君の喪に服しているのだ。［…］処刑された影の時代の哀れな王よ，［…］見よ，知事よ，［…］見よ，闘志よ，［…］

ここで「君」と呼びかけられるムーランはもはやマルローの追悼演説の主題ではない。そうではなくて，彼こそがマルローの言葉の宛先なのである。これ以降，発話者マルローにとってムーランは二人称の存在となる。マルティン・ブーバーの名高い定式にしたがえば，マルローとムーランの関係は，「我とそれ（彼）」の関係から「我と汝」の関係へと移行するのである。

同様のことが「フランスの若者」に関しても言える。ムーランが活動していた時代のあとで生まれた，ムーランのことを知らない「1600 万の子供たち」もまた演説冒頭では三人称であらわれていた。それに対して，演説の最後でマルローは，「フランスの若者」に「君」と呼びかけ，ムーランの最後の日の「形をなくした顔」を思ってみるのだ，と祈願していた。ここで「若者」もまたマルローの言葉の宛先，つまり二人称の存在となるのである。こうして，マルローと「若者」もまた「我とそれ（彼）」の関係から「我と汝」の関係へと移行するのだ。

重要なのは，このような一連の呼びかけが聴衆たちにもたらす効果である。マルローによって親しく「君」と語りかけられた「ムーラン」と「若者」との関係性にも変化がある。つまり，マルローにとってムーランが二人称で呼びかけることができる近い死者であるのと同様，「若者」にとってもムーランは，近くにいる死者，二人称の存在になるのである。

このことを単純化すれば，次のように言えるだろう。わたしと君が話をしているとき，「彼」のことが話題となったとする。このとき，この「彼」は，わたしと君と同じ場所にはいない。それに対して，わたしと君が話をしているとき，君がもう一人の誰かを二人称で「君」と呼べば，この誰かもまた，わたしと君と同じ場所にいるはずである。そうでなければ，二人称で呼びかけることはできない。マルローはムーランに対して「君」と呼びかけた。そのあと，マルローは若者に対しても「君」と呼びかけた。その結果として，ムーランとマルローと若者は，すくなくとも発話理論上は，同じ場所にいることになる。そして発話者マルローを介して，若者たちにとっても死者ムーランは，近くにいる存在，ひとりの「君」となるだろう。マルローの演説の巧みな構成によって，ムーランに一度も会ったことのない戦後生まれのフラ

ンス人にとって，三人称の死者であったムーランが，二人称の死者へと変換されるのである。

「わたしたち」の境界

ジャン・ムーランは，フランスの若者たちにとって，三人称の死者から二人称の死者となる。このことと平行して，マルローの演説中にあらわれる一人称複数「わたしたち」の境界が変貌することに気をつけよう。この演説を契機として，ドイツとの戦争を知らない若者たちもまた，暗い時代の記憶を共有する「わたしたち」フランス国民に組み込まれることになるのだ。

ジャン・ムーランを追悼し，ドイツとの戦いを思い出すように呼びかけるこの演説では，最終部分を除いて，「わたしたち」という語は，マルローと彼とともに暗い時代を実際に体験したフランス人たちを指している。たとえば，マルローは次のように呼びかけていた。

> ここに入るのだ，ジャン・ムーランよ［…］わたしたちのうちの一人に隠れ家を提供したせいで，ラーフェンスブリュック収容所で死んだ最後の女性とともに。影とともに生まれ，影とともに消え去った民衆とともに，夜の時代のわれらの兄弟たちとともに，入るのだ。

ジャン・ムーランに対して呼びかけている以上，ここでマルローの言う「わたしたち」「われらの兄弟たち」とは，発話者マルローとムーランとともにドイツ占領下のフランスを生きた者たちを指すと考えるのが適当だろう。それに対して，演説最終部でマルローは，「フランスの若者」に対独レジスタンスに参加した者たちが口ずさんだ「パルチザンの歌」を聞くように呼びかけていた。

> 聞きなさい，フランスの若者よ，わたしたちにとって不幸の歌であったものを。これこそが，ムーランの遺灰の葬送行進曲なのです。

ここで言われる「わたしたち」には，もちろんマルローとかつてこの「不幸の歌」を聞いた者たちが含まれる。だが，それだけではなく，マルローがここで「フランスの若者」に対して呼びかけている以上，この「わたしたち」には戦後生まれの若者たちも含まれるはずである。演説最終部に於いて，かつて「パルチザンの歌」を歌ってドイツに抵抗した「わたしたち」フランス国民に，その時代にはまだ生まれてさえいなかった，戦後生まれの若者たちも確実に同化するのである。同じ不幸の記憶をもつ者たちが —— 実際にその不幸を生きた者とそうでない者たちが —— ひとつの共同体を形成するのだ。この「パルチザンの歌」の記憶を共有する者たちが形成する共同体，それがマルローがここで成立させようとする第五共和国のフランス国民にほかならない。

ミサと記憶

フランス第五共和制の初期に，アンドレ・マルローが行ったジャン・ムーランの追悼演説について考察してきた。上に見たように，マルローの演説の効果，すくなくともこの文学者にして政治家がねらう効果とは，三人称の死者を二人称の死者へと変換することであった。このセレモニーを経て，ジャン・ムーランは，彼を直接知ったわけではない者たちも含めたフランス人たちにとって，「わたしたち」フランス人のために死んだ，身近な死者となるのである。ところで，これはまさしくキリスト教徒が教会で千年を超えるあいだ行ってきたことではないだろうか。

非キリスト教徒である多くの日本人は「イエスは人類のために，人々の罪を贖って，十字架にかけられて死んだ」という彼等の教義を知ってはいる。しかしこの知識だけではイエスは三人称の死者にとどまる。それに対して，キリスト教の信者にとっておそらくイエスは二人称の死者である。キリスト教団とは，イエスに対して「あなたはわたしたちのために死んだ」という信仰をもつ者たちの共同体であろう。ミサとはそのことを信者に教え込む儀式であった。十字架によってイエスの受難を想起せざるを得ない，教会という

空間に於いて，信者たちはミサを繰り返してきた。その反復によって，一度も直接会ったことのないひとりのユダヤ人が「わたしたちのために死んだ」のだと思い込んできたのである。同様に,「ジャン・ムーランはフランスのために死んだ」という知識だけでは，ムーランは三人称の死者にとどまる。それに対して，ムーランに関して,「あなたはわたしたちのために死んだ」と思う者たちが第五共和国のフランス国民を形成するのである。

こうしてわれわれは，マルローの演説がキリスト教の儀式によく似ているものであると理解できるだろう。だが共和国のセレモニーとキリスト教のミサとはやはり異なる。キリスト教は死後の救済を約束する。この世の終わりに死者は復活し，最後の審判を受けたあと，天上へと上るだろう。それに対して，世俗の共和国はこのような救済を約束することはできない。ジャン・ムーランも暗い時代の死者たちの記憶も，決して天上へと上ることはない。ただ，横へと，つまりパンテオンの内側へと移動するだけである。ムーランの死した身体は，あの時代に死んだ者たちの記憶と一緒に，共和国の神殿のなかに入り，そこにとどまりもはや移動することはないだろう。マルローの言う「復活」とは，コメモラシオンによって，つまり人々が記憶を共有することによってのみ可能となるものである。忘却の穴の中にいたムーランは，このセレモニーを通して，人々のイマジネール（想像界）のうちで復活するのだ。そしてその記憶は，ムーランに一度も会ったことのない若者たちの記憶のなかにもとどまり続けるだろう。

だが教会のなかで長いあいだ繰り返しミサを行ってきた，そして今でも行っているキリスト教徒たちにとっても，もしかしたら事情はさほど違わないのかもしれない。ミサとは，受難の前日の最後の晩餐が起源であると言われるが，そこでイエスは弟子たちにパンを分かち与えて，こう言っているからである。

> これは，あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい[9]。

教会のなかで信者たちは，割かれたパンを口にして，イエスのことを思い出してきた。このコメモラシオンの儀礼を通じて，イエスを知らない者たちに，イエスに出会ったことのない次の世代の者たちに，救世主の記憶が伝えられてきたのである。最後の審判が訪れ，死者が復活するまでのあいだ，信者はイエスの記憶を伝え続けるであろう。フランスの若者たちに「わたしたち」のために死んだムーランの記憶を共有させようとするマルローといったいどこが違うだろうか。

付記：本稿は 2016-2019 年度科学研究費基盤研究（C）「アンドレ・マルローとフランス国民の記憶」（課題番号：16K02524，研究代表者：竹内修一）による研究成果の一部である。

[9] 新共同訳『ルカによる福音書』22 章 19 節（強調は引用者による）。ちなみに，「わたしの記念として」という箇所は，ルイ・スゴン訳フランス語版聖書では，《en mémoire de moi》となっている。